

〔研究会報告〕

1970年代のヴェトナム戦争映画

—敗戦の表象—⁽¹⁾

大 勝 裕 史

はじめに

本発表では70年代後半のヴェトナム戦争映画が、終結したばかりの戦争をどう表象するかを論じる。この時期のヴェトナム戦争映画が歴史的に例外的なのは、輝かしい勝利ではなくスキャンダルに満ちた敗戦を表象せざるをえなかったことである。

ヴェトナム戦争映画の歴史

ヴェトナム戦争の略史に触れておきたい。アメリカは1964年のトンキン湾事件を口実として、軍事顧問団の派遣から直接的な介入へと踏み出していく。アメリカがダナンに海兵隊を上陸させ、北爆を開始した1965年は、「アメリカの戦争」としてのヴェトナム戦争の始まりとみなせる。だが1968年からは世論が戦争反対に傾き始め、1973年に米軍は撤退した。その後1975年にサイゴンが陥落し、その翌年には南北ヴェトナムが統一されヴェトナム社会主義共和国が成立してしまった⁽²⁾。

David Jamesによれば、1960年代から1980年代までのヴェトナム戦争映画は大まかに四つの時期に区分できる⁽³⁾。

- (1) 60年代から70年代中期まで、つまり戦争が続いている間は、原則的にヴェトナム戦争映画が製作されない。
- (2) 70年代末にヴェトナム戦争映画の最初のブームが生じる。
- (3) 80年代中期にPOW/MIA映画(行方不明者とされながらも実は戦争捕虜としてヴェトナムの地に囚われた米兵を奪還するというアクション映画)が流行する:『地獄の7人』(*Uncommon Valor*, 1983), 『地獄のヒーロー』(*Missing in Action*, 1984), 『ランボー:怒りの脱出』(*Rambo: First Blood Part II*, 1985)など。
- (4) 80年代後期に戦場をリアリズムで描く映画が多数製作される:『プラatoon』(*Platoon*, 1986), 『ハンバーガー・ヒル』(*Hamburger Hill*, 1987), 『フルメタル・ジャケット』

(1) 本稿は2021年7月27日にオンラインで実施された国府台学会研究会での発表の記録である。発表は、筆者の研究内容を教職員の方々に紹介するという趣旨で行われた。

(2) Gallupによれば「アメリカがヴェトナムでの戦いに軍隊を送ったのは間違いだったと思うか」の間に「はい」と答える者の割合が1968年から50%を超えるようになる。<https://news.gallup.com/poll/2299/americans-look-back-vietnam-war.aspx>

(3) David James, "Rock and Roll in Representations of Invasion of Vietnam," *Representations*, 29, p. 87.

(*Full Metal Jacket*, 1987) など。

ここでは目下のテーマである (2) に至るヴェトナム戦争映画の流れを中心に述べたい。まず60年代から70年代中期までは、戦場を舞台とし米軍の視点から戦闘行為を描く劇映画としての戦争映画は、主流映画に関する限り『グリーンベレー』(*The Green Berets*, 1968)——ジョン・ウェインの主演・監督による単純な反共イデオロギーに基づく好戦的なプロパガンダ映画——を除いてなかった⁽⁴⁾。このことは、歴代の戦争でハリウッドが果たしてきた役割を考えれば異例の事態である。しかし、この時期のハリウッドはヴェトナム戦争を完全に黙殺したわけではない。60年代末から、「狂気のヴェトナム帰還兵」表象(精神に異常をきたした犯罪者としてヴェトナム帰還兵を描く)が大量生産されていたのである——『殺人者はライフルを持っている』(*Targets*, 1967), 『ダーティハリー』(*Dirty Harry*, 1971), 『ソルジャーボーイ』(*Welcome Home, Soldier Boys*, 1971), 『ハイジャック』(*Skyjacked*, 1972), 『タクシードライバー』(*Taxi Driver*, 1976) など。こうした映画はヴェトナム帰還兵の実情を反映したものなどではなく、不人気な戦争の直接表象を避けつつ、メディアを賑わす戦争の残酷な醜聞——1968年2月のテト攻勢のさなか、逮捕した解放戦線兵士の頭を路上で白昼堂々撃ち抜く瞬間を捉えた写真(「サイゴン処刑」)、70年代に入ると空爆により大火傷を負いながら路上を裸で逃げる少女の写真(「ナバーム弾の少女」)、とりわけ道徳的な衝撃を与えたのは、米兵自身が民間人を虐殺したミライ事件の写真と記事だろう——に目配せするという妥協形成的な想像の産物と解釈すべきだろう。

敗戦の表象

60年代末から世論の支持が低下しただけでなく1975年に社会主義国家の成立をもってアメリカが掲げたヴェトナム戦争の大義は完全に失われた。こうして1978年になって初めてヴェトナム戦争映画の最初のブームが生じる。この時のヴェトナム戦争映画は難問に直面していた。莫大な犠牲(自国兵士の戦死者5万人以上や負傷者、また後に心的外傷後ストレスとして認知される精神疾患や市民生活への適応不全に陥った者、さらにはその近親者)を払いながらの敗戦を、どんな大衆的に受容可能な物語に落とし込むのか。つまり、勝利を描けない戦争映画の製作という難題である。

まず伝統的な戦争映画ジャンルに一見すると近い作品として『ヤング・ソルジャー』(*The Boys in Company C*, 1978)と『戦場』(*Go Tell the Spartans*, 1978)が作られた。前者は訓練キャンプから戦場に至る兵士の成長物語だが、兵士たちは無能な上官を嫌悪し続け、戦場からいかに離脱するかを夢見る。後者は米軍の敗走劇である。また帰還兵映画では『帰郷』(*Coming Home*, 1978)が、ヴェトナムで下半身付随となった傷痍軍人と彼を支えるボランティアとのロマンスを描いた。これは、第二次世界大戦の帰還兵映画『男たち』(*The Men*, 1951)のヴェトナム戦争版と言えそうな作品である。最後に『ディア・ハンター』(*The Deer Hunter*, 1978)と『地獄の黙示録』(*Apocalypse Now*, 1979)は、ヴェトナムをトラ

(4) 主流映画に限定しなければ、マーシャル・トンブソンが主演・監督した『肉弾08作戦』(*A Yank in Vietnam*, 1964)が最初のヴェトナム戦争映画だと言われている。他にも、同じトンブソンが主演した『電撃海兵隊』(*To the Shore of the Hell*, 1966)もこの時期の希少なヴェトナム戦争映画の一つである。

ウマの場として視覚的に表象した。両作品は、米兵同士の兄弟殺し（前者ではロシアンルーレット、後者では元大佐の暗殺）を結末とする点でも共通する。

(2021.9.20 受稿, 2021.11.18 受理)